

の頭が觸るたびにがくがくしてゐた。

『源坊、それお婆ちゃんにお別れをするんだ!』かう叔父に言はれて、隅の方に小さくなつて坐つてゐた源といふ私の弟の兒は、怖々ながら傍に来て棺の中を覗いたが、すぐ身を震はして向ふの方へ行つて了つた。

『怖いんだよ、まア、あの子は?』

笑ひながら姉が言つた。

『お婆さんが化けて來やしないかと思つてゐるんだよ。』

かう私は傍から言つた。

『でも、大きくなつたね、源坊——』姉はなつかしさうに其方を見て、『お父さんやお母さんからたよりがあるかえ? 今、朝鮮かえ?』

『來年の春には、歸つて來るからつれて行くんださうです。』

『父さん、覚えてゐるかえ?』

姉がかう訊くと、長い白い羽織の紐を肩にかけてゐたその男の兒は、ちよつと微かに點頭いて見せた。

『父さんと一所に行くかえ。』

『な、源、——父さんが迎へに來ても、行くもんかツて言つてたな、源』かう叔父は傍から言つた。誰も皆男の兒の方に眼を移した。

それは私の弟の最初の子であつた。私の弟は軍人で、今、朝鮮の方へ行つてゐた。この子の出來た時、父母はまだ公然に結婚してゐなかつたので、生れ落ちるとから、此子は里子に出されなければならなかつた。それを不憫に思つて叔父叔母は今日まで其の世話を見てやつた。『爺さん育ちは安い安い』と言ひながらも、叔父叔母は其の男の兒をすつかり甘やかして育てた。時にはこの男の兒のあるといふことが老夫婦に取つての唯一の楽しみであるかのやうに見えた。その夜も十二時過ぎで、その男の兒は大勢の人達の中に雜つて、大きな黒い

眼をばつちりと明いて起きてゐた。棺の前に行つて線香を上げたりなどしてゐた。

それはもう明方近い頃であつた。次の間に行つてしばしの睡眠を得てゐる人達も多かつた。叔父さんは少し休んだら何うです？ 明日もあるんですから』かう度々勧められても、叔父は矢張起きて火鉢の傍に坐つてゐた。

昔の話が人々の口の上つてゐた。叔父と義兄とは、御維新の時の京都の騒動などを繰返して話してゐた。『え、あの時分の會津様の勢といふものは大したものでしたから……さう、丁度、烏羽の戦争が始まらうといふ時分に、河内の御領分に行つて、山陵の御用をしてゐましたが、京都では今帝様と將軍様との間に戦争が始まつたといふので、急いで歸つて來ましたよ』など、叔父は言つてゐた。『さうでしたか、矢張、長州でしたかな……どうも、あそこのとこがよ

くわからないんですがね。桑名と會津とがいくらか薩長に乗せられたやうな處があるんですな』義兄はその時分のことを思ひ出すやうにして言つた。義兄は其頃十六七で、君公について、中山道を引揚げて來た時の話をした。

『もう昔になりましたな』
などと言つた。

その傍で、私と姉とは、故郷の田舎の藁葺の小さな家の話をしてゐた。日常の好い縁側、絶えず蜂の唸るやうな聲をして鼻唄を唄つてゐたお婆さん、庭の錦木に來る目白をおとりで捕るつもりでかけて置いたもちに學校に私が行つてゐる留守に旨くかゝつて、姉が跣足のまゝで飛び出して行つた話などが盡きずに私達の口の上つた。『さうさお前——』かう言つて姉は昔のまゝのなつかしい調子を出した。『さうぢやないがね、あそここの機屋の家だがね……。さうかえ、あそこでもお鐵さんは死んで、息子は常陸丸で戦死して、お前達が行つても、

話をするやうな人がなくなつたね……。それでもお妾がゐる話して呉れたかえ？ 今ぢや、あのお妾——さうおせんさんツて言つたね。あの人の代になつてゐるんだらうねえ。お鐵さんは、あのお妾の爲めに苦勞ばかりしてゐたのに不仕合な人だね。さうかねえ、あのお勢ツ子が神田へ來てゐるかえ？ 次のおつやが何處か嫁に行つて、旨く行かないで、子供を一人置いて歸つて來てゐるツて聞いたがね……。『考へるやうにして、『故郷にも、もうしばらく行かないねえ、變つたツて言ふ話だねえ。』』

『随分變つたよ。今ぢや、城址に立派なモスリンなんか出來たんだからね。』
『さうだつてね。』

『機屋の主人は、僕よりも弟の變つたのにびつくしてゐたよ。當さんがこんなに大きくなるんだから、私なんか年を取るのは無理はないツて言つてゐたよ。あの妾も、富さん、悪戯で、私の家に来てゐるさばかりして仕方がなかつたツ

て言つてゐましたよ。』

『びつくりしたらうね。』

『それから、家を見せて貰つた——』

『元の通りになつてゐるかえ？』

『小さな家だねえ、小さいのに一番先に喫驚したよ。あんな家だつたかと思ふよ。入口の梅は枯れてゐたよ。それでも栗の木は大きくなつてゐた。人にひろはれない中につて、よく皆なして起きたつけねえ。』

『本當サ——』

姉も昔を思ひ出すやうな風に見えた。

『出て來てから、もう何年になるえ？』

『もう十二三年だよ。』

『國にゐれば好かつたんだ。姉さんなんか——』

『だって、仕方がないやねえ。これも運だからねえ。』

私達はいろ／＼なことを頭に浮べてゐた。過ぎ去つたシーンが墳墓の中から一つ／＼浮び出して来た。誰もかれも皆それ／＼ Story と Drama とを持つてゐた。

『寒くなつて来ましたね、明け方近くなつて……』
傍にゐた従弟が言つた。

『何うも今頃になると、一寸眠むくなつて来ますね。……なアに、大したことはないんですけど……ひとり手に、頭が下つて行くから可笑しくなりますね』もう一人の従弟はかう言つて火鉢の傍に寄つて来た。

棺の前の蠟燭はチラ／＼と灯子を落してゐた。終ひ際になつた線香は、灰を長く、煙を短くさびしさうにしてゐた。姉は立つて行つて、貧窮にやつれた瘦せた顔をくつきりと白い障子の前に見せて、そして長い新しい線香に火をつけ

た。やがて棺の前に坐つたまゝ長い間合掌してゐる姉の姿がさびしさうに此方から見えた。

『叔母さんもう／＼亡くなつたなア!』

暫時してから、姉はこんなことを言つて此方に戻つて来た。

義兄の出した時計を私は覗くやうにして、『もう何時です?』

『五時十分前——』

『それぢやもう夜が明けるでせう。』

かう言つた私は其まゝ立上つて入口の障子をあげた。夜もすがら閉め切つた一間には、線香の匂ひだの、蠟燭やランプの焰から出る炭酸瓦斯だの、人臭い重苦しい呼吸だのが一杯に満ち渡つてゐた。で、私は新しい空気を吸はうと思つて、入口から下におりて、前の九間開口の戸を一枚明けた。

新しい冷めたい空気が快よく私の頬に觸れた、混濁した頭脳は俄かに生き返

つたやうに感じられた。黎明の光の漲つた東の空には、明けの明星がキラ／＼と美しい冴えた光を放つてゐた。何處か遠くで工場の汽笛が鳴つた。

『あ、彗星が——』

私は思はず叫んだ。

明けの明星のすぐ上のところに、長さ五六間位の彗星が、手に取るやうに明らかに美しく靡きわたつてゐた。濃い群青色をした空には無数の星屑が煌々と閃いてゐた。

『來父さん、彗星が見えますよ。』

義兄も姉も從兄も皆な出て來た。「はア、よく見える……かなり大きい」など、義兄は仰ぐやうにして言つた。

『此頃、見える見えるツて、新聞などで書いてありましたけれど、かうはつきり見えるとは思ひませんでした。』從兄はかう言つて、『それに、わざ／＼寒い

のに起きて見るのも大變なもんですからなア。』

『さうですとも。』

『彗星ツて言へば、そら、清、明治十二三年頃に出たのを見たことがあるねえ。母さんが義兄さんの家に姉さんの病氣の看病に行つて、お幸を伴れて來た時さ——』姉は其時分を思ひ出すやうに言つた。

『さう／＼、母さんが、お幸をつれて、朝、まだ暗い中から車の通しで、義兄さんの家から歸つて來た時、よく見えたつて話をしてゐたね。あれは、これよりは大きかつたね。』

『こんなもんじゃないともね、お前。』

姉は再び空を仰ぐやうにした。

『お幸が生きてゐると、義兄さん、もう今ぢや三人子持位だねえ！』

『もつ生きてゐれば、三十一二だからな。』

『可愛い子だったよ。本當にお幸は——ア、ちゃん、はアちゃんツて、ちゃんと、私と清とを區別して呼ぶやうな伶俐な子でしたよ。——何うして死んだんだか』姉はひとり言のやうに言つてそして内に入つて行つた。一番あとから叔父が出て來た。

『そら、見えるでせう、叔父さん。あそこに、あけの明星のすぐ上のところに……叔父さん眼がわるいからよく見えないかな。』

『見えますよ。』

叔父はしよほくした目を上に向けるやうにして言つた。

朝の空氣は次第に明方の明るい光線を雜へて來た。私は長い間外に立つて居た。

私の手向けたのと奥の邸からよこしたのと、從兄達の心配して呉れたのと、

この三對の生花が、狭い細い道に並んでゐた。生花の中では黄い、赤い菊の花が殊に見事であつた。

年を老つた坊さんが弟子を二人つれて來てお經を讀んだ。

それは大勢な人達に取り巻かれた賑やかな葬式であつた。その町——古い郊外の町に住んでゐる人達で長い間馴染になつた叔母の葬式を見送らないものはない位であつた。肴屋のお婆さん、乾物屋の上さん、車屋の後家さん、地主の上さん——さういふ人達は皆な數珠を持つたり何かしてその跡について行つた。町の若い衆、子供などもぞろ／＼とついて行つた。通る町の家々では、皆な外へ出て、丁寧なそれを見送つた。それは晴れた日で、川添ひの紅葉が繪のやうに見事に明るくかゞやいて見えた。

葬列はその古い町を五町ほど行つたところから右に折れて、綺麗な水の流れてゐる橋の上を通つてひろい通りをレール路の方へと行つた。

レール路の前のところで、叔父の意見で、棺は送つて来て呉れた大勢の人達に別れをつけることにした。大勢の人達は両側に並んで、そして棺の向ふに行くのを見送つた。棺が通ると、山手線の汽車が凄じい音を立て、レールを通つて行つた。

古いさびしい家に、叔父は一人ほつねんとして座つてゐた。私は葬式の後の雑務の相談相手に頼まれて、よく其處に出かけて行つた。

『ばアちゃん居なくなつて淋しいだらう。』

かう私が弟の兒に言ふと、

『もう、お化は出やしないね。大丈夫だね……。うそだい、出やしない。』などと言つてゐた。色の白いこまちやくれた顔をした兒であつた。

叔母の寝てゐた室の前は、すぐこの町のやつちや場になつてゐた。日が暮れ

ると、廣い土間の中に一杯青物が並んで、カンテラがいくつとなく並んでついで、『いくら？ いくら』などいふ聲が盛にきこえた。背の高い番頭は、算盤と帳面と鉛筆とを持つて、大根だの甘薯だの菜だの葱だの、並んでゐる間を忙しさうにして通つて行つた。

八百屋の車が大きな店の前に幾つとなく並んでゐた。

『あれが喧しくつてね。』

病んだ叔母は常にそれを煩さがつてゐた。

『寝られなくつて困るよ。さうかと言つて、先も商賣だしね』など言つてゐた。叔母はその喧しい聲の中で長い月日を苦しい床に横つて過して来た。

『何時位までやつてゐるんです？ あれは。』

『十二時近くまでやつてるよ。』

『あれには一番困る。』

叔父も常にさう言つてゐた。

叔母のゐなくなつた室で、暗い二分心のランプか何かで、香奩の計算だの、くやみかへしの相談などを私がしてゐると、その賑やかな聲は矢張りいつものやうに前から聞えて来た。

『いくら？ いくら？』

六

私は兄の手傳ひをして、奥の邸の一間によく通つて行つたことがあつた。兄は歴史物の調べをその主人から頼まれて、その二階に一時その編輯室を置いたことがあつた。

たことがあつた。

初めて私の其處に行く時分には、兄の下につかはれてゐた老人が其處に一人ゐた。兄は役所につめてゐるので、滅多にそこにやつて来ることはなかつた。

老人は六十二三であつた。小柄な、髪の毛の白い、やさしい口の利き方をする人であつた。名高い老中をしたある大名の家中で、お留守役などを勤めたことがあつたといふことであつた。老人は眼鏡をかけて細かい字を寫してゐた。

私は町の裏を流れてゐる綺麗な川に沿つた裏道を通つてそして出かけた。思出の多い路だ。そこには、秋は薄や萱などが一面に茂つてゐて、時には長い鎌でサク／＼それを刈つてゐる人などもあつた。川は一ところ瀬をなして流れてゐて、ドオといふ水の音が遠くから聞えた。

私は其處に来て、いつも足を留めた。そして長い間水の流を見てゐた。

……女ツて言ふものはあゝいふもんだ。これから一步を進めて行けば、自分

の身の破滅だ。思ひかへさう。男の矜持まじりを捨て、思ひかへさう……こんなことを思つて私は其處に立つてゐた。

若い私の理解力ではまだ十分に女を理解することが出来なかつた。私の若い煩悶も唯早熟な女の餌となつたばかりであつた……。

あの女……あの女……。

私の疵は長い間治らずにゐた。

『だつて、仕方がないんですもの。親が何うしてもさうしなければいけないつて言ふんですもの……』かう言つて女は泣いた。初めて女の涙といふものを見た私だ。わかいやさしい心持を持った私だ。私は女の言ふことをきいたのだ。

『一生、忘れやしない——』

其の言葉を、私は川の縁で、何遍くりかへしたらう。焦立つ心を私はその言葉で何遍押へたらう。過ぎ去つた昔よ。

私は毎日八時頃に家を出た。叔父叔母の住んでゐる家に一寸寄つて挨拶して、そして奥の邸の方へと行つた。

門から玄關までの路——その路を私は何うして忘れることが出来やう。其處には入口に小さな石の碑が立つてゐて梅と茶畑とがひろく竹藪のあるあたりまで連つて向ふに見えてゐた。春は山櫻が咲いて、何處からともなく落花がちらちらと落ちて來た。横、椿、檜、寒山竹——さういふものが深い緑の影をあたりに漂はせてゐた。鳥の聲が靜かに聞えた。

路の左の奥には、小さな祠があつて、そこで、どうかすると、鈴を鳴らす音が靜かにきこえてゐた。濃淡の影のチラつく間の路——私の其時分の心持にしつくり合つたやうな路だつた。

玄關から入らずに、私はその傍の内玄關から入つて行つた。其處でいつも私を迎へたのは、赤い杏のやうな頬をした若い綺麗な女中であつた。そこから私

は奥方などのゐる茶の間に入つて、丁寧に挨拶をして、そして奥の方へ行くのが例であつた。二階に上る階梯は、奥の座敷と離れとの間にあつた。私は娘のゐる室の傍を通つて行かなければならなかつた。娘は下町風の意氣な後姿を見せてゐたり、私の足音にちよつと振返つて此方を見てにつと笑つて見せたりした。娘の姿の其處に見えない時ほど物足りない思ひをすることはなかつた。

階梯は壁について上にのほるやうになつてゐた。階梯を上つた處の古い板敷は踏む度にギー／＼とけた／＼ましい音を立てた。邸の建物の中で、昔の下屋敷のまゝになつてゐるところは此處ばかりであつた。襖を明けて入つて行くと、大抵私より先にその老人は來てゐた。

もう机が出してあつて、其上には寫字をする爲めの古い書物などが開かれてあつた。老人は、私が入つて行くと、眼鏡を外して、机の端に置いて、丸い火鉢にかけてある大きな土瓶に手を當てゝ見て、そして茶を淹れる仕度をした。

私が行かない中は、老人は決して茶を淹れなかつた。

罐の蓋に茶を入れて、それを小さな急須に移す時の老人の手つきは今でも私の眼の前にあつた。老人は茶碗を唇に當てながら、其時々世間話を一つ二つして、その次にはきまつて銀の煙管を出して、そして煙草を一服二服吸つた。

そこは八疊で、低い天井が頭を押へるやうなところであつた。南には窓があつて、そこから午前は明るく日が當つた。庭の緑の濃やかな影が疊の上にチラ／＼した。

私は午前の九時から午後の三時まで、其處で古い文章や日記を分類したり寫字をしたりした。昔の藩政時代の勤王家の日記や、小普請役の勘定書や、藩侯が老中を勤めた頃の家老の覺書や、文武疊の生徒の成績を書いた書類や——さういふ古い空氣の中に浸つて私は時を移した。『さうですな、もう入谷の朝顔は好いでせうな……こんどの休暇には一つ朝早く蓮を見ながら出かけて行きます

かな』老人は退屈すると、いつもこんな話を私にした。

私は其頃もうかなり小説を世の中に出してゐた。丸善の二階でさがして来たトルストイの『コザツクス』だの、わざ／＼アメリカまで注文してやつて、つい此頃届いて来たツルゲネフの『親々と子供』だのを風呂敷の中に包んで持つて行つたりした。老人 休んだ時には、仕事をほつたらかして、さういふ書物に讀耽つて、一日を暮して了ふなどもあつた。土曜日には午後から兄がやつて来た。どうかすると、邸の主人がそこに來て、兄を相手に、昔の話を長々と話して行くこともあつた。

その一間に續いて書庫があつた。それはひろい十疊二間をぶつ通したやうなところであつた。其處には本箱が幾つとなく重り合つて、古い黴臭い蟲の匂ひが一面に四邊に漂ひわたつてゐた。書庫の奥には三尺の高窓があつて、そこからは裏の方の庭が見えた。土蔵の軒のところに出來てゐる大きな蜂の巢なども

見えた。私はいつも其處に行つて首を出して新鮮な空氣を吸つた。

其處にはいろいろな書物があつた。經史を始め、文集、詩集、文化文政頃から明治に互つて出來た本は大抵ないものはない位であつた。私は退屈すると、寫字の筆を措いて、その中に入つて二時間も三時間も暮した。「覺後禪」だの「はこやのひめこと」などといふ本をさがし出してこつそり讀んで見たりした。

ある日、私が書庫にゐると、向ふの室から人の此方に來る氣勢がした。主人でも來たのか知らと思つてゐると、中から艶かしい聲がして、

「誰れ？ 其處にゐるのは？」

「……」

私は狼狽した。

娘はしきりの戸を細目にあけて、「誰かと思つたら清さんね。」

につこりしながら草履をはいて娘は此方へとやつて来た。紫の矢絰の派手な銘仙か何かを着て、帯をだらしなく低く結んでゐた。髪は銀杏返に結んでゐた。

『此間から誰かと思つてゐたのよ。ミシ／＼歩く音がよくするから、あのお爺さんでも本をさがしに来るのかと思つてゐたのよ。清さんとは思はなかつた。』

こんなことを言つて、背の高い頭を下げるやうにして歩いて、何かおもしろい本があつて？』

『別に……何も……』

『皆なむづかしい、かへりのついた本ばかりでせう。つまらないわね、こんな本いくらあつたつて。』

こんなことを言つて、ある本を棚から引下したが、「まア、大變！ くら、こんな埃！」かう言つて、埃の一杯についた両手を私の顔の前に出して見せた。しばらくしてから、

『清さんなんか面白いでせうね。』

『どうして？』

『小説なんか書いて、いろ／＼面白いことがあるでせうね。』

『何にもありやしませんよ、面白いことなんか。』

『此間讀みましたよ、そら、文藝俱樂部とか何とかいふ雑誌に出てるた、そら、華族のお姫様のことが何か書いた……面白かつてよ、よくあんなことを書けるものね。』

私は顔の赧くなるのを覺えた。叔父叔母や兄の口からかねて他所ながら娘のことは聞いてゐた。此處の奥方には姪に當つてゐるのださうだが、貰はれて来る前まで下町で育つたので、何處か嬢さんらしいところのないのが瑕だ。奥さまがあれでやかましく言ふんですけれどもね……。どうも小さい頃の癖は中々治らないものと見えてね。女中だの御用聞だのと話をするのが好きで仕方が

ないんですよ。それに、お琴の方をツて、奥さまはやかましく言ふけれど、矢張長唄の方が好きなんですから困るんですよ。此頃ぢや、もう奥さまも匙を投げてゐらつしやる』こんなことを叔母が兄に話してゐたのを聞いたことも一度や二度ではなかつた。しかし、そんな噂は、私の娘に對してのあくがれを打消すことが出来なかつた。それほど娘は美しい容色を持つてゐた。

『此方に來て御覽なさいな。』

かう言つて、私は其時始めて娘の居間につれて行かれた。何でも主人も奥方も外へ出て留守の時であつた。綺麗な毛氈のかけてある小机、一輪挿しの中の紅い薔薇、メリンス菊の模様の座蒲團、柱の短冊、淺黄の更紗の中につゝんで壁にかけてある三味線——さういふはなやかな色彩が俄かに私の眼の前にあつた。私は狼狽した。しかし私は其處に一時間ほどゐた。お茶だのお菓子だのを御馳走になつた。小説の話が何の彼のと出た。

『私も小説を書きたい。書けるでせうか。』

こんなことを言つて、娘は艶やかな眼付をして私の方を見た。

書庫の奥に、暗い／＼ところがあつた。二疊位の板敷で、本箱がその周圍に一面に積かさねられてあつた。ある本箱には史記訂本といふ札が張つてあつた。ある本箱には韓昌黎集と書いてあつた。裏の高窓の方から來る光線が微かにその半面を明るく見せた。

それは老人の休んだ日であつた。娘は狼狽して、その暗いところから此方へとやつて來た。私の胸はドキ／＼した。私は何うしたら好いかと思つた。高等學校にゐる此邸の若旦那の顔がすぐ私の眼の前に見えて來た。あの娘はしかし若旦那と一緒にゐるのを嫌つて／＼嫌ひぬいてゐたといふ話がつゞらて私の頭にひよつくり浮んだ。……娘の居間の戸の閉る音が軽く聞えた……。何うした

ら好いだらう。かう思つて、私は長い間、机の上に首を垂れて考へてゐた。

火鉢の火は白く灰になつてゐた。茶でも飲まうと思つたのは、それから暫くたつてからのことであつた。私は小さな火をさがし出して、その上に炭を載せて、そして團扇で軽く煽いだ。

それは秋の静かな日であつた。晴れた空が前の高窓からそれを覗いて見られた。庭男が落葉を掃いてゐる音が靜かに前に聞えてゐた。もすがたゝましい音を立て、啼いて通つて行つた。

『仕方がない——』

かう思つたが、その一面には言ふに言はれない喜びが胸に溢れてゐた。さつき寫しかけた文字をつづけて寫さうとしたが、どうしてもその氣になれなかつた。私は茶をガブ／＼飲んだ。

氣が着くと、前の高窓に當る日影は、もう三時近い時刻を知らせてゐた。私

はもう一度こつそり娘の居間を覗いて見やうと思つたが、何だか怖いやうな氣がして、そのまま風呂敷包を抱えて、いつものやうに階梯を下りて行つた。茶の間には、奥方も誰もゐなかつた。時計が唯動いてゐた。

例の頬の赤い女中がにこ／＼しながら私を内立關まで送つて呉れた。

その歸り路に、私は川の瀬の縁のところ、自分を忘れたやうになつて長い間しやがんで水の流れを見てゐた。碧空を白い雲が通つて行つた。

暗い光線と、本箱と、黴臭い埃の匂ひと、矢絣の銘仙と、帯と、古いギシ／＼といふ二階の階梯と高窓に當る日影と、老人の煙管をトン／＼と叩く音と……。

毎日私の歸るのを待ちつけて、叔母は何かしら茶請をこしらへて置いて呉れた。

『今日は少し早かつたね。』
などと言つて迎へて呉れた。

『まだ少し早いかと思つたけれど、一つ探つて見たよ』かう言つて、サクくと水氣の多い柿を茶盆に載せて出したり、新甘藷をふかして置いて呉れたり、人に貰つた栗饅頭の折を開けて置いたりした。

『今日は何にもなかつた。仕方がないくす湯だ!』叔母はをかしさうに笑つて、火鉢にかけて置いた鐵瓶に觸つて見たりした。

『昨日も一昨日も來ないから、どうしたのかと思つたら、風邪を引いたんだつてね。昨日兄さんが來てそんなことを言つてゐたよ。もう好いのかえ? 大事におしよ。風邪が何でも元になるんだから』などと叔母は言つた。

それは叔母の死んで行つた室だ。其時にも矢張其處に火鉢が置いてあつた。錦繪が矢張くすぶつたまゝ壁に張つてあつた。明治の初年に參議になつた人達の寫真を集めた古い銅版畫が麗々しく額に入つて長押にかけてあつた。過ぎ去つた昔よ。

娘の笑つた顔——その顔は長い間私の心に絡みついてゐた。それはいくらかまへやうとしても容易につかまへることの出來ないやうな顔であつた。それに今、考へて見ても、その輪廓だけしかわからないやうな姓の心であつた。私達の間には、普通の戀人のするやうな話は一度だつて繰返されたことはなかつた。將來はどうするなどいふ男の考を容れさせるやうなところのない娘の態度であつた。

私が書庫に入つてゐると、娘はきまつてこつそりそこからやつて來た。書庫と私の居間との間の戸は殆ど音もしないやうに微かに明いて、そして白い顔がすぐ私の前にあらはれて來た。

私達は黙つてゐるのが例だつた。
静かに静かに開く戸の音——それが私の耳に今でもある。

七

奥方は私のゐる室に上つて來た。

「清さん、お氣の毒ですけれど、これを書いて下さいな。先方に持たせてやるものを書いてやらなければなりませんから。」

かう言つて、奥方は奥方自身で書いた横綴の帳面と、奉書を横に折つた大きな立派な帳面とを私の前に並べて行つた。

娘の嫁に行く一切の道具を私はそこに書かなければならなかつたのだ。私の頭は眩惑した。私は暫時は何うして好いかわからないやうな心の惑亂を覺えた。筆笥五棹……長持三棹……紋付黒縮緬二枚……お召縮緬二枚……拾縮緬二枚……紺二枚……金襴帯一筋……かういふ文字を丁寧に奉書に書かなければならなかつた。娘の爲めに……嫁いて行く娘の爲めに……。

『甲州の金持だつて、辯護士か何かだつて……大變な支度だと。』
何も知らない叔母はこんなことを私の前で平氣で言つた。

『仕方がない——』

かういふ言葉が、私と娘との間に最後に取交された言葉であつた。實際の方面から言つては、此のまゝ二人の間柄を明るいところに出したところで、それは何うにもならないやうなものであつた。これが叔父叔母に知れ、兄に知れ、

此の邸の主人夫妻に知れたら、それこそ大變だ……。私の儘だつて安穩にしては居られなかつた。祕密にして置くよりほか仕方がなかつた。

……茶碗二個……膳一個……盥三個……縮緬寝衣三枚——其處に来て、私は筆を措いて、後頭部に兩手を當て、そして後に體を倒した。

其時、居間の戸の明く音がした。幸ひにも老人は風邪か何か引いたとかで、其日はやつて來てゐなかつた。

『仕方がないから……後生だから……。祕密にして置きさへすれば、どんなことでも出来るから。』

かういふ意味の言葉を其時娘は言つたのを私は覚えてゐる。

私は弄ばれた。一時は私もさう思つた。しかし、長い年月がその考の誤つてゐたことを私に知らせた。虚偽の涙——さう思つた娘の涙が矢張本當の涙であつたことが段々知れて來た。

私は旅に出だ。それは山の奥へと深くく入つて行くやうな旅であつた。娘の結婚する夜、私は山の奥の奥の人氣の少い温泉場の一間で、汚い襟あかのついた蒲團にくるまつてそして寝てゐた。

侍女つひになつて娘の嫁いで行つた家に一月ほどゐた叔母は、私の母や兄に向つていろく／＼なことを話した。「嬢さん、何うしてあゝだらしがないんだらう。朝はおそくまでねてゐて、私が蒲團をかたづけてやらなければならぬんですからね。旦那さんが氣の毒がつて、お前、もう少し早くお起よつて言ふんだけれど……それが出來ないんですからね。奥方があれほどやかましく言つたのは無理はないと思ひますよ。寢衣の世話まで私がしてやらなければならぬんですからね。……もう一月で澤山、私はこり／＼しました。それやね、財産が澤山おあんなさるんだから、二人一緒に、やれ芝居だとか舞踊だとか見に出かける

のも好いけれど……それが毎日なんですからね。目に餘るやうなことがよくありましたよ。』

叔母は新夫婦の隣の間で寝ることになつてゐた。時には夜中に起されたり何かすることなどもあつた。『どうもだらしがない人ですよ、お女郎か何かならあれでもすむけれど、普通の家の奥さまで候ふつて言ふには、あんなことではとても長くはつゞかないと思ひましたよ。朝、起きて、それも十時より早く起きたことはないんですがね。赤い長襦袢か何かで、湯殿など行つて顔を洗つてゐるんですもの。餘りだと思ひましたから、先さまにも、ばアやがついてゐてそんな真似をさせると思はれてはすまないと思ひましてね、よく教へてやりましたけれどね……もう二十歳になつて、あれでも困りますよ。今の處では、旦那と二人きりですからあれでもまあ好いですけども……國の人達が来るやうになつては大變ですね。』

『お嬢さんはそんな風でしたかね。』

かう私の母親も喫驚したやうに言つた。

しかし、さうした細かい話は、皆な私の肉體にはねかへつて来て、執念く絡みついた。長襦袢の朝の姿が眼の前にチラ／＼して仕方がないことなどもあつた。『自分が奉書の帖に書いてやつたあの長襦袢だ。』かう思ふと私は呼吸も咽喉も塞るやうな氣がした。體を人に任せることを何とも思はないやうな、體を男を任せるためにのみ働いてゐる柔らかな線とやさしい心、私は房々とした女の髪が自分の體に一面に蔽ひかぶさつて来るやうなのを感じた。

私の眼の前には、叔母の寝てゐる次の間が見えた。新しい箆笥や長持の置いてある室、派手な肩當のついた寝道具、眠むさうな白粉のはけた女の顔をのり／＼映る大きな鏡臺——其處には新婚の甘い疲れた空氣が不愉快に漲り渡つてゐた。私は私の微臭い書庫の匂ひを嗅いだ。

やがて私は娘の懐妊したことを耳にした。それで、叔母はまた頼まれて行くことになつた。『イヤだけど、奥さまのお頼みだから、どうも仕方ない。』行く前に叔母は家に来て、母親にこんなことを言つたのを私は聞いた。

嫁いてから二月目に娘は懐妊した。それが一方ならず私の神経を刺戟した。私の體はブル／＼戦へた。私の血と女の血と女の亭主の血とが黒く淀んで一つになつて流れてゐるやうな氣がした。娘が梅の實を里の家に貰ひによこした話などは私の脈といふ脈に熱湯をそゝいだやうなものであつた。

私は毎夜、青いやつれた娘の顔を夢に見た。月經がとまつてやつれた顔をしてゐる時分、私は邸の二階の下のところで娘に逢つた。

『清さん、しばらく。』

娘は平氣で言つてゐた。憎かつた。腹立しかつた。苦しかつた。

私に世の中に出たいと言ふ心持がなかつたなら——私のさびしさを慰めて呉れる藝術と云ふものがなかつたなら、私は今は何んなになつてゐるか知れなかつたのだ。私は孤獨と嫉妬との苦痛を唯机に向ふとによつてのみ慰めてゐた。やがて女の兒が産れた。其の女の兒を抱いて娘が里にやつて來た時にも、私はまだ一枚いくらの寫字をその古い二階の一間でやつてゐた。女の兒は友禪の派手な産衣を着て、向ふからつき添つて來た女中に抱かれてゐた。

私の血はまた湧き立つた。

しかし、娘の顔を見ると、私の憎惡と憤怒とはいつても消えて行くのが例だつた。娘の笑顔の中には私の血を靜めるだけの濃やかな影と複雑した心とを示してゐた。『清さん、こんな顔をしてゐますから見て下さい』と、言はれたりすると、私は怒ることも憎むことも出來なくなつた。娘は私の心の中をもちつと見透すやうな柔らかな涙組んだ眼をつねに私に見せた。

八

その女の児が誕生になるかならない時分から、娘は病氣だとか言つて、里の方へ戻つて來てゐた。私は其頃はもう其の邸の二階には行つてゐなかつた。いろ／＼な噂を私は聞いた。

「もうとても、元へは歸らないんでせうよ。などと叔母も言つてゐた。『お嬢さんがわるいんだから仕方がない。あれぢや、ともしつかりした家の奥さんなどにはなわやしませんからね。……え、何だかわるい評判もあるんですよ。御亭主のお友達で、坂田とか何とか言ふ人があるんですがね。その人と變な噂

が立つてね。それも苦情の一つになつてゐるんですよ。どうも幼い時分からませた兒だつたが、男戀しやで仕方がないつて言ふ評判ですよ。』

『そんな風ですかね。あのお嬢さんが——』
 『今ですと言ひますがね、お邸にゐる時分から、さういふ話が二三度あつたんですからね。』

『さうですか。』

私の母親は呟驚して言つた。

子供をつれて里の家に来たが、子供の世話などは碌にせず、日幾日に出といふお化粧三昧に身をやつしてゐるといふ話なども私は聞いた。娘に對する私の興味は、その頃ではもう餘程覺めかゝつてゐた。それに、昔のやうに毎日顔を合せるやうな機會のないことが段々私達の間を遠くして行つた。私が今の家内を持つた時には、娘は私の家内の爲めに見繕つた派手な柄のお召を一反お

祝にと言つて叔母に持たせてよこした。

『お嬢さんのお見立だけある。』

など、叔母は笑つてゐたが、若い私の家内は、その柄の鮮やかなのを喜んで『お嬢さんツてどんな人？』など、私にきいた。『好い柄ね』など、言つて、何遍もそれを出して見たりしてゐた。今でもその着物は妻の箆笥の中に藏つてある筈である。

娘は邸に歸つてゐる時分、裏に大きな水道の貯水池が出来ることになつて、大勢の技師だの土工だのがあちこちから入込んで來てゐた。叔父が明治の初年にその整理を引受けた藪地はその爲め高い價に賣られることになつた。竹藪は切られ、畠は掘られ、築山は破壊され、トロコのレールは縦横に到る處に敷かれた。冬の朝など行つて見ると、霜の白い野に土方達が木片や落葉を集めて焚火をしてゐるやうな光景によく出會した。監督の技師らしい役人は、スコッチ

の背廣に厚ほつたい外套を着て、中折をかぶつて、掘立小屋の前で、土方を指揮をしたりした。

木枯の寒い郊外の町は、其頃、今までにないやうな眼覺しい活氣を見せた。馬肉屋だの、小さい汚い料理店だのが盛に出來て、其處には白粉をべた／＼塗つた女が遅くまで客を相手にして戯れてゐた。

娘のゐる邸と工夫達の働いてゐる場所とは要垣一つで隔てられてゐるやうになつた。私は娘がさびしさうな顔をして、その間の小さな柴折戸の前に立つて、工夫連の働いてゐるのを見てゐる光景ををりをり想像した。娘は離縁の話がきまる時分に、そこにつとめてゐる藤田とかいふ監督の技師と出來て、それがばつと世間に知れて、邸からも養女離縁と言ふことになつて、すつかり出入をさしとめられて了つた。娘の生んだ女の兒は前の亭主の田舎で引取ることになつて、それで話が一段落をつけた。私はそれから長い間娘にも逢はなければ、そ

の噂をもきかなかつた。今のところに住むやうになつても、娘の所在は知らなかつた。

「お嬢さん？ あれつきり、ちつともたよりはなないよ。こられもしないだらうからね。しかし、今度は落附いてゐるツて言ふやうな話だよ。五六年前まで新宿裏にその男と一緒に住んでゐるツて言ふ話だつたよ。」

叔母はさう言つてすぐ話を外の方に持つて行つた。

九

邸の裏の井戸に身を投げて死んだといふのは、叔母のすぐ姉に當る人であつ

た。私も微かに其伯母を覚えてゐた。色の白い、瘦削^{ほせう}な、眼のぱつちりした、「それはお前、お政叔母さんとは比べものにならないよ。」かう母は私によく言つて聞かせた。今の旦那が全盛で富士見町に邸を有つてゐた時分には、伯母は其方に行つて旦那の世話をしてゐた。私は五歳位の時に、その伯母と母親とに伴はれて、招魂社の社殿の中で半日遊んで来たことを今でも覚えてゐた。

「なぜ、井戸になんか身を投げて死んだんでせう？」

私達は其の噂を田舎で聞いた。

「お雪伯母さんの方がお政叔母さんよりも何んなにやさしくつて好かつたか知れないのに——何故そんなことをしたんでせうね。気が小さかつたからね。」かう言つて母親は涙を流した。

祖父はその報を得てすぐ田舎から出かけて行つたが、一週間ほどして歸つて来て、祖母と一緒に、娘の不仕合な身の上を嘆いて泣いた。盲目な祖母の眼か

らも涙が流れた。

『奥さまに疑ひをかけられて、……それでくわつとのほせたんだらう。』
 などと母親は言つてゐた。その原因は後になつても私達にはわからなかつた。
 それに、誰に聞いて見ても、本當のことは話さなかつた。

叔母が亡くなつてから三四日経つてある日の朝であつた。私は俄かに思ひ立つてその不仕合の伯母の墓へと出かけて行つた。私は今日までその伯母の墓に行つたことはなかつた。墓のある寺は知つてゐても、ついぞそこに入つてさうして見やうとも思はなかつた。『なアに、原因は矢張、奥方が嫉妬を焼いたんですよ。伯母さんは綺麗な人で、十八九の時分から小間使に上つて、旦那にお氣に入りましたから……。旦那が勤王の方で藩にゐられなくなつて、おし込同様に當郷の村の方に行つてゐる時にも始終行つて世話をしてゐたんですから——』かう叔父が詳しく其話をして聞かせなかつたなら、私はまだ其の墓をさがして

見やうなどといふ好奇心を起さなかつたに相違なかつた。

不思議にも四十年前も前に悲惨な死方をしたやさしい綺麗な伯母のことが私の胸に生返つて來た。

『墓地に入つてから、右に行くんですから。』

かう叔父は教へて呉れた。

私はやがてその寺の前に行つた。それは町の通りに面してゐた。地藏尊が一基門の前に立つてゐた。庫裡の前には、山茶花が紅く白く咲いて、大きな銀杏の見事に黄葉したのがそこにあつた。四邊はしんとしてゐた。

『墓地は？』

本堂の裏はすぐ棟割長屋になつてゐて、墓地らしいところがあたりに見當らないので、丁度其處にやつて來た労働者らしい男にたづねて見た。

『墓地は——そこから一度横町へ出て、そして五六間行つたところに門があ

ります。』

かう其男は教へて呉れた。

汚い長屋が五軒も六軒もつゞいてゐた。破れ障子につかまつて、襪はぎの四ツ身を着て、ウジ／＼などと言つてゐる子供などもあつた。埃の一杯にたかつたおもとの鉢の日當りに出してある家などもあつた。少し行くと、成ほど其處に小さな門があつて、その中が一面の墓地になつてゐた。

私はあちこちをさがし廻つた。叔父にきいて來た無縁塔の所在はわかつてもその近所にあるといふ伯母の墓は、容易にわからなかつた。私は墓石に刻んだ字を一つ／＼読み下しながら、右から左へ列を趁つて縫ふやうにして歩いた。それは晴れた日であつた。墓地の向ふに、西洋づくりの白いペンキ塗の二階屋があつて、そこからピアノが靜かに流るゝやうに聞えて來た。梧桐の半分枯れて半分青い葉に午前の日影がぬれたやうにさしてゐた。

私は無縁塔の方へとまた引かへして來た。

ふと私の眼は、私の家の姓を書いた字に留つた。見ると、そこに小さな墓がある。臺石なども碌々ないやうな墓だ。それが若くして美しくつて、そして井戸に身を投げて死んだ伯母の墓だ。

私は何とも言はれないやうな氣がした。私は四十年後の秋のある晴れた日の午前に、かうして俄かに思ひ立つて私といふものがたづねて來たことに一種の深い意味を感じずにはをられなかつた。若い戀の血は、墓場の中からも絶えず蘇つて來てゐる。かう思つて、私は悠久な不可思議な感に撲れた。

私はぢつと立盡してゐた。

やがて私は持つて來た線香と櫛とをその前に手向けた。祖母の盲いた眼から出た涙などが犇々と思ひ出されて來た。過ぎ行く……過ぎ行く……皆な過ぎ行く……これが人生の生命の潮流ではないか。

小鳥の啼く聲がチ、とあたりに聞えた。

十分間後には私は其處を去つて町の通の方へ出た。同じ町だ。同じゴタ／＼した郊外の町だ。矢張、荷車が通つてゐる。馬車が通つてゐる。自動車を通つてゐる。小間物屋の店にある毛絲のシャツが同じやうに見えてゐる。奉公に行つた下町の商家から私の遁けてかへつて來た時と少しも違つてゐない。櫛の垣は矢張其處にある……。

『伯母さんのお墓詣ももう何年にもしたことがない。』
叔父はかう言つて目をしばたゝいた。

+

甥の繁雄は、叔母の三周忌のお詣に青山まで出かけて行つたが、午近くに歸つて來て、そして話した。

『お墓の紅葉が綺麗でしたよ、これは母さんが幼い時分に芽生を十二叢から探つて來たんですツてね。大きくなりましたね。あの近所にもあんな見事な紅葉はありませんでしたよ。眞赤になつて、それは見事ツて言つたらない。え、お墓は綺麗に掃除がしてありました。おばアさんの墓のところにあるどうだんもよく紅葉してゐました。え、茶屋で桶を借りて、自分で水と箒とをかりて行つてそして花を上げて來ました。叔父さん、しかし、皆なにお花を上げるには大變ですね。五錢さかきを買つたんですけれど、足りないんですもの。仕方がないから、千秋の分には一本上げて來ました。ばアちゃんに、おぢいさんに、とうさんに、母さんに、それに叔母さんとあるんでせう。中々大變ですよ。』

『さうね、一々上げては大變ね。』

私の妻はかう傍から言つて「本當に、家のお墓に行くと、何うしてか、澤山に亡くなつたんだらうと思ひますよ。亡くなつた兄さんが祖父さんのお葬式の時に、三坪取つて置いたんだつて言ひますがもう大抵一杯になつて了つたでせう。この間、叔母さんの時などにも、繁ちやんの母さんの棺とつかえて、道の方まで掘つたつて言ふぢやありませんか……。私達はもっ入れませんわねえ。」など、言つて笑つた。

「叔父さん——」

ふと思出したやうに甥は言つて、「今日、めづらしい人に逢つちやつた」

「誰に？」

「そら、奥のお嬢さんと言ふ人がありましたね。あの人に逢つちやつた！」

「何處で——」

私の好奇心はすぐ引寄せられた。

「練兵場をこえて、信濃町の停車場へ来て待つてゐると、私の前に、丁度此處の叔母さん位の女の人がゐて、じろく、私の方を見てゐるぢやありませんか。私も何だか見たやうな人だとは思つたけれど……小さい時分、逢つたぎりですからね。はつきり誰だつて言ふこともわからないんですよ。と……じろく、私の方を見てゐましたツけ、急に傍に寄つて来て、繁雄さんですネツて言ふぢやありませんか。まア、大きくお成んなすつたこと、丸で見違へて了つて、誰だか一寸はわかりませんでしたの何のツて言ふのよ。僕はやうやくわかつたから、奥のお嬢さんでしたねツて云ふと、なつかしがつていろんなを訊いたり何かするんですよ。叔母さんの死んだのも知らないでゐて、まア、左様ですか。三周忌で、御詣に行つたのですかつて、それは喫驚してゐましたよ。何でも二三年北海道の方か何かに行つてゐて、今年の秋歸つて来たやうな話をしてゐましたよ。それに、僕の顔が死んだ母さんに似てるの、母さんが今まで生きてゐる

たら、どんなに喜んでせうのツて、文勢人のゐる前で平氣で言ふんでせう。僕はこまつちやつた！』

『どんな風をしてゐたえ？』

『ちよつと綺麗な風でしたよ。あのピカ／＼する何とかいふコートがありましたね。あれを着て髪は若若しい束髪に結つてゐました』

『子供は？』

『子供はつれてゐません』

『一人ぎり——？』

『え』

甥はかう言つて私の方を見て、『まだ若いんでせう？』

『家の叔母さんよりは一つ二つ上だらう』

『さうは見えませんか。三つ四つ下位に見えますね』

『おつくりをしてゐたからだらう』

かう傍から私の妻は言つた。

『何處にゐるんだか、そんな話はしなかつたかえ？』

『そんな話はしなかつたけれど、叔父さん。代々木にゐるんでせうツて聞いてゐましたよ』

『さうかえ』

暫くしてから、『それにしても、よく分つたね、お前があの人によく逢つたのは餘程小ない時分だらう』

『え、よく奥へ行つて、僕がお菓子なんかを買つたのはまだ十歳位の時ですからね。よく向ふでもわかつたと思ひましたよ』

『母さんに似てゐる……』

その言葉は私にある感じを起させるに十分であつた。その感じは其日一日絶えず私の體に絡み着いてゐた。遠い昔を思ひ出しながら、私は紅葉の明るい庭を歩いた。

お富さん——亡くなつた兄の妻——私の従妹——鹿千絞の片をかけた幼い姿——麻の葉の赤い帯をしめた娘姿——私が猫をいぢめるのでよく泣いて叔母に吩咐けたやさしい娘——ねむの葉のやうに觸られるのを恐れたやうな弱い心——曇つた空の中からちらと見えた青空のやうな眼——

『お互に氣を知り合つてゐるから却つて好いだらう』と言ふことで、その従妹が私の家にお嫁さんになつて來た時のことなどが思ひ出されて來た。郊外の古い大きな家、其夜、媒妁役をつとめる筈の遠い親類の中年の女が、むつといふ大きな肴を買つて來て、『むつはむつましいッて言ふから』などと言つたのを私は今でもはつきり覚えてゐた。神棚には燈明が明るくついて、儀式をする座

敷の方は綺麗に片附いてゐた。

そこには新しく買つたニツケル臺の大きなランプが置いてあつた。

従妹を私の嫂として眺めることが、私には不思議であつた。何んな顔をして來るだらうといふ好奇心よりも、却つて自分の顔を従妹に見られるのが耻しかつた。薄暮い夕方の空——庭の向ふに黒く見えてゐる車井戸——畠と庭をしきつてゐる檜の垣——その上からおつくりをした體を半分くろく見せて、叔父叔母に伴れられてそして従妹はやつて來た。私は顔を見られるのが耻かしくつて奥の方へ姿をかくして了つた。

今の繁雄を懐妊して六月位から八月位までお富さんは病氣療養の爲めに里に歸つてゐたことがあつた。私が時たまたづねて行くと、にこ／＼して迎へて、『清さんが來たから、母さん、何か御馳走をして上げませうね』などと言つて、よく五色飯などを炊いて呉れた。芝居の話がすきで、團十郎や菊五郎の話をよく

くして聞かせた。私達にはわかりもしない筋を長々しく倦まずに話したりした。江戸の娘の『Tropidor』といふやうなところのある人であつた。

私は叔母の死んで行つた一間に、今でもお富さんを置いて考へることが好きだ。長火鉢の向ふ側に品よく坐つて、金からかはの文庫の中から、厚い豊國の錦繪の綴ぢたのを出して私に見せて、『これがきられ與三郎よ。お富が好いねえ』などと言つた。従妹がゐると、メリンスの赤い片だの縮緬のきれ端などが其處此處に散ばつたり、小さな華奢な針箱が室の隅に置かれてあつたりして、何處となく室が彩やかで明るかつた。田舎言葉で私が物を言つたりすると、『マア』と言つて、身形を崩して笑つた。猫の額のやうな庭の隅にある菊だの山茶花だのを折つて来てそれを小さな一輪挿にさして眺めてゐるといふやうな靜かな落附いたところもあつた。

『家にゐた時のやうに芝居に行つて見られないのが残念ですよ』私の家に來

てからは、従妹はいつも口癖のやうにかう言つて私にこぼした。『清さんが、もう少し芝居が好きだと好いんだけど……好きにおなりよ。清さんは田舎者だから駄目よ』などと言つて、私の顔をぢつと見た。そして、兄の妻になつても私にはいつまでも同じなつかしい従妹であつた。

銀杏返し——髪はいつでもきまつてそれにばかり結つてゐた。母や髪結が勧めても丸髻には滅多には結はなかつた。『今の中ですよ。赤いかせかけか何かかけて派手に結ふのも今の中ですよ』かう言はれても、『でも、丸髻は何だかきまりがわるいから』と言つてゐた。形の好い銀杏返しに結つて背の低い小づくりな姿が今でも暗い光線の中にはつきりと見えてゐる。

兄の生活の亡びて行つたのは、いろ／＼な原因があるだらう。世間的の解釋

もつければいくらもつくだらう。しかし、従妹のやさしい心に沈んで行つた生活ではなかつたらうか。烈しかった兄の性質が、従妹に逝かれてから段々やさしい静かな消極的なものになつて行つたのでもそれが大抵は想像される。兄は従妹の墓に向つてのみ目を送つてゐたのである。

私は従妹の死んで行つた時の悲惨を此處に繰返すに忍びない……。

其時、私は叔父叔母の家へ知らせにと飛んで行つた。それは五月の末の頃であつた。矢張その同じ町だ。行つて見ると、叔母の家は戸閉がしてあつて誰もゐない。隣で訊くと、茶摘に出てゐるといふことだつた。私は此の裏の畠地をあちこちとさがした。

滴るやうな美しい茶の緑葉の畠の中から、新しい手拭をくつきりと見せて、摘みかけた籠を傍に抱えて、そして叔母は出て來た。

午前の日影が明るく照つてゐた。

十一

叔母の三周年の日から四五日経つた後のことであつた。それは晴れた好い日曜日であつた。午前十一時頃、私は庭を歩いてゐると、ポストの中に、門の外から郵便脚夫が一通の手紙をソツと投げ込んで行つた。

私は小さな柴折戸のかき金を外して、そこに行つて、その手紙を出して、らはすぐ封を切つた。それは私が關係してゐた女から來たのであつた。

私の血——お富さんや、邸の娘や、其他多くの女に依つて沸された私の血は、今になつても同じやうにその女の爲めに沸かされてゐるのであつた。女の手紙

は簡単であつた。此間はお眼にかゝれなくつて残念でした。今日、あそこに行かうと存じます。もしお都合が好かつたら、電報ですぐ知らせて下さい。私は行つてお待申してをりますから』かう言ふ意味がぞんざいに書いてあるばかりであつた。

私は妻や甥や下女の手はその手紙の落ちなかつたことを喜んだ。つゞいて私は女の待つてゐるといふ樂園を想像した。それは郊外の見晴しの好い長い廊下のつゞいたやうな家であつた。綺麗な風呂場が二階の階梯を上つて行つたところにあつて、湯に浸りながら、野を横つて行く汽車の煙を見ることの出来るやうな位置にあつた。長い廊下の奥には人目に遠つた六疊の一間があつた。

午飯をすまして、私は急いで町の通りの方へ出て行つた。男と女との互に持つた快樂をはゞかるところなく受けたり與へたりすることが出来るやうな年輩と氣分とに私達はもう達してゐた。體の衰へることを氣にする以外に、快樂

を恣にする私達を礙けるものは何物もなかつた。私は若い生々した愉快な心持になつて町の通を歩いて行つた。

電報を受取るところは、停車場の階梯を下に下りて行くやうなところにあつた。詰襟の洋服着た若い技手は、『四ジにユクですなア』と言つて、宛名と差出人とを調べて、そして私の出す金を受取つた。私は石の階梯を元氣よく驅けるやうにして登つて通りへ出た。

今一時少し前だ。これから三時間を何うして過さう。かう思つた私は、ふと奥の邸の老主人を思出した。話があるから暇な時にちよつと來て呉れと此間中から言はれてゐるのを思ひ出した。近くにあるながら、殆ど何年にも行つて見たことがない。奥方が死んだ時にも一寸顔を玄關に出したばかりである。老主人はまだ大丈夫だが此頃では耳が遠くなつて餘程大きな聲をしないと通じないといふ話などは叔父から聞いて私はよく知つてゐた。不思議にも私は其處に行つ

て見やうと思ひ立つた。三時間後に女に逢はれる喜悅を抱いて、そして昔の戀の跡を見ろといふことは、私に取つては頗る興味のあることであつた。私は得意な、生がひのある、しかし落附いたやうな心持で、靜かにその郊外の町の通を歩いて行つた。

竹藪が切開かれて、其處に澤山貸家が出来るので、門から入つて行つたところは、もう昔のやうな瀟洒な趣を見せてはゐなかつた。しかしなつかしい長い裁込に添つた路は依然として綺麗に掃除されてあつた。高野槇や、椿や、山茶花や、大きな山櫻などは元のまゝになつてゐた。

邸は改築されて、私の其時分よく行つた二階はもう影も形もなかつた。格子戸のはまつた玄關には鈴がついてゐて、明けるとけたましく音が四邊に鳴響いた。

やがて女中が出て來た。しかしその女中のタイプも私の來る時分の女中の姿

とはすつかり變つてゐた。其處に月日の經つて行つたことが想像された。女中は大きく庇の出た髪に結つて、女學生か何ぞのやうな挨拶をして、そして私を奥に取次いで呉れた。

次の茶の間——奥方のよく坐つてゐた、その次の間に主人は丁度坐つてゐたらしかつた。「何？ 何といふ？」と繰返して女中に客の名を聞いてゐるのが聞えたが、やがて『あ、さうかく、岡田か？ よく來て呉れた。通せ、通せ』といふ聲がつゞいてした。

私の通されたのは、瀟洒な庭に面した廣い十疊の座敷であつた。座敷のところ／＼には、本箱が三つも四つも据ゑられてあつて、隅に片寄せられて大きな桐の唐机が置いてあつた。主人は今でも眼鏡をかけて、そして古い歴史物などを讀んでゐるらしかつた。

女中は白い丸い手爐てあがりを先づ運んで來て、次に茶を持つて來た。

老主人の顔には、まださう老いたやうなところもなかつた。私が奉公に田舎から出て来た時分といくらも變らないやうに見える位であつた。高い聲を出して元氣よく話した。

「耳さへよければ、まだ気分は若いつもりぢやが——」
などと言つて笑つた。

私に来て貰ひたいといふ用事は大したことはなかつた。近所の寺に非常に古い由緒ある不動の木像があつて、それが平將門時分に田原藤太秀郷の持佛であつたといふことがわかつた。で、何年間心がけて、漸くそれを考證して今では世に公にしても差支がなくなつたから、貴様に一つひまな時に縁起を書いて貰ひたいといふことであつた。老主人は其木像の所在地をさぐるについての苦心、所在地がわかつてからその寺の主僧が頑固で厨子くしをあけると目がつぶれるとか何とか言つて容易に見せないのを何の彼のと賺して漸く見せて貰つた。

苦心を得意になつて話した。「それは何しろ山緒のある不動だから、立派な木像ぢや。成田の不動などより餘程すぐれてゐるものぢや」など、老主人は話した。

一枚明けた障子から庭の一部が明るく見えてゐた。山茶花が見事に咲いて、小鳥がチ、と啼いてゐた。午後の日影は木の繁つた庭の中に微かに薄く射し込んでゐた。

若い時は美男子であつたらうと思はれる老主人の顔——奥方の白い肌を見せてた湯上り姿——美しくつて若くつてそして井戸に身を投げて悲惨な最後を遂げた私の伯母——兄のこゝしだやさしい顔——娘の柔らかなちつと滲み込んで行くやうな心持——微臭い書庫の中の匂ひ——明るい日影——これから逢ひに行かうとしてゐる女の笑顔——。

さうでしたか。それは大變でしたね。そこまでお調べになるには、一通で

は容易に出来ないことでせう。』

などゝ私は調子を合せてゐた。

私の行つてゐた日光の話なども出た。

『さうか、あの和尚まだ丈夫か。酒を飲む和尚だつたな。』

などゝ老主人は言つた。

一時間ほどゐて私は辭した。

置き去つた過去の光景や情調が、今の現在にすつかり溶けて流れて一つになつたやうな氣分で私は歩いた。ライフの底に横つてゐる暗い死の影も、箇人の上になつてなく起つて來ずには止まない悲劇も、何も彼もすつかりその柔らかな氣分の中に溶けて流れてゐるやうに私には思はれた。あるシーンとあるカラクターとが私の前に繪のやうになつて見えゐた。

『今の刹那もすぐ過去の潮の中に入つて了つて、私を待てる今の女の思出も、やがて繪の中の光景の一つになつて了ふのだ。峠の上に立つて、あたりを見廻してゐるやうな氣分である時でも、過ぎ去て了つては、峠でも何でもなくなつて了つてゐるんだ。ライフは唯續いて行くばかりだ……』

こんなことを考へながら、私は川に架つてゐる橋を渡つて行つた。

家に歸ると、妻の姪になる女學生が董色の袴を穿いてヴァイオリンか何かを持つて遊びに來てゐた。

『叔父さん、ばア』などゝ言つてその明るいにくくした顔を見せたりした。

甥の繁雄はと見ると、昂奮したやうな顔をして、姪と肩を合せるやうにして、庭の方へ一緒に歩いて行つたりした。若々しい聲で、姪は戀の歌をうたつた。

『ちよつと出て來るよ。』

かう言つて、私は出る支度をした。

『何處へ行くの？』叔父さん、私が折角來るといつでも叔父さんは出て行て了ふんですもの……今日は家にゐらつしやいよ。そして何か御馳走して下さいな。叔父さんがゐないぢや、さむしいぢやないの。』

姪はこんなことを言つて、好い匂ひのする髪やら袖やらを私の體にすり寄せた。

『今日是用があるんだから——ゆつくり叔母さんに御馳走して貰つて遊んでお出でよ。此次の音樂會には一緒に伴れて行つてやるから……』

『さう？ 本當？ 本當に伴れて行つて呉れる？ うれしい！』

かう言つて姪は胸を撫でるやうな形をした。

郊外の停留場から私は電車に乗つた。柞はの紅葉した草籤や、ジツクザツクした家の家根や、郊外の町の踏切や、長く連つて見えてゐる丘や——さういふものが私の眼の前にあつた。

(をばり)

叔 が ら

寺の後の隅にある二反歩ほどの水田は、今年は借手がなくつて、遅くまで耕しもせず田植もせずに放つて置かれたが、他の周囲の田の苗の緑が綺麗に朝風夕風に靡く頃になつて、急に寺の墓掃除の男が他の日雇取の二三人の男と一緒にやつて来て、けんけの咲いた荒れた田を慌たどしく掘り返して、用水を引いて来て好加減にほつほつと苗を並べて植ゑて行つた。

『方丈さんな、慾べいかわくから、こんなことになるんさ』

墓掃除の男は、苗の置いてある田の畔のところに蹲踞んで、先づ一服といふ形で烟管を口に啣へながらこんなことを言つた。

『作は今年は何んか？』

『作りていんだが、去年、小作がおさめてねえからな』

『ふん、それでか……』

『作の野郎、此處借りて作らねえぢや困るんだで、毎日のやうに行つて頼むん

だけでも、方丈さんな、何うしてもきかねえんだ。あんな奴に貸して置くと、小作が取れねえべしぢやねえ。田がわるくなつて仕方がねえつて言ふんだ』

『あいつは怠け者だからなア。』

他の一人の日雇取の男は、『それでも、他にいくらも借手があんだんべいな？』

『方丈さんな、何んのかんのとむづかしいことべい言ふんだアな。なアに、借手がねえけりや、俺がつくる。俺が日雇取を入れてつくるつて言つてゐるだけが、とう／＼さういふことになつちやたんだがな。』

『田がわりいでな……。日雇取にかけちや損だんべい』

こんなことを皆なして噂し合つた。『好い方丈さんだが、もう少し慾をかわかねえいと猶好いんだが』などとも言つた。日雇取達は精々と働いた。榛の並木の間から日影が晴れやかにさし込んで來たり、向ふの桑畑の深い緑の中に村の

娘の赤い襷や白い手拭が透いて見えたりした。時には雨が青い野を斜に掠めて通つて行つた。

半ば植ゑかけた田のほとりに、時々方丈さんの姿が見えた。脊の短い方丈さんは、へこ帯をぐるぐる巻きにして、頭の毛の伸びたのも氣にせず、本堂の傍から暗い墓地の中を通つて、杉や竹藪の茂つた中を此方へと出て來た。その墓地には、この寺の歴代の僧の丸い墓石が澤山に並んで、深く苔蘚に封じられてゐた。方丈さんもやがてはその中の一つになる運命を持つてゐるのではあるが、そんなことは一度も念頭に置いたことがないといふ風で、いつもサツサとその暗い濕つた墓地の中を通つて、榛の木の並んだ明るい野の方へと出て行つた。

『何うもうなひ方がぞんざいだな』時にはかう言つて墓掃除の男に話しかけることもないではないが、大抵は黙つて日雇取達の精々と働いてるのを見てゐる。

た。桑畑を越して向ふに、明るい野が見え、青い田が見え、汽車のレールが見え、信號柱が見え、湧くやうに渦き上つた初夏の午後の白い雲が見えた。

『すつかり田をわるくされちやつた。丸で肥料なんか使はないんだから』
こんなことを方丈さんが言ふと、

『本當でがんすとも……。手入がわるくつちや、田も臺なしだ』
傍にゐた日雇取が調子を合せた。

方丈さんはいつもそこから野の方へと歩いて行つた。日雇取が見てゐると、桑畑の中の眞直な道をぶらりぶらりと静かに歩いて、近所の畑に出てゐる百姓の上さんと話などをして、それから汽車のレールの踏切のあたりまで行つて、そこで長い間黙つて立つてゐて、そこから静かに引返して來た。時には汽車が凄じい煤烟をあたりに漲らして、寺の森の裏にある停車場へと入つて行つたりした。

時には色の淺黒い肥つた寺の上さんの姿も其處に見えた。上さんは墓掃除の男を新さん新さんと呼んでゐた。『新さん、茶でも飲みなせい』などと遠くから聲をかけた。『これから日雇取を始終入れて、草を取つたり何かするんぢや大事つたな。……私ももう少し體が丈夫だと好いけれど、とても百姓は出來ないから』などと言つた。その癖、庫裡の周圍にある畑の前栽物は、皆なこの上さんと新さんとでやるので、里芋でも茄子でも菜でも皆なこの上さんが指揮しつてくらせるのであつた。町の人々は暑い日影を饅頭笠に避けて、畑でせつせとさくを切つてゐる上さんの姿をいつも見つけた。『お寺の上さんな、えらい働き者だ。方丈さんが留守でも皆な間に合つて行くんだから。じんやほんの世話でも何でもするんだからな。』などと人々は言つた。

そして暇があると、裏の山に行つて、枯枝や松葉などを拾つて、それを庫裡の廣い臺所に持つて來ては積んで置いた。主僧との仲も至極圓滿で、『おきよや

おきよや』などとやさしく主僧は呼んだ。一人ある娘が今年十三になつて、小學校を卒業して、遠い町の女學校に行つてからは、その交情は一層濃かになつて行くやうに見えた。

それでも主僧が東京で豫定以上に遊んで來たり、近在へ行つて泊つて來たりするやうな時には、上さんの顔にはきまつて曇つたむつとした表情が現はれた。『もう、働くのは御免だ。働くのは、縁の下の力持ちだ。厭なこつた。此方ばかりせつせと東京も見ねえで働いてゐたつて仕方がねえ』などと言つた。しかしそれもその時ばかりで、あくる朝は、上さんは矢張早く起きて、元氣の好い顔色をして、庫裡の戸を明けて、竈の下の火をたきつけた。

寺の後の水田の苗は、日増に大きくなつて行つてゐた。水に不自由のないこのあたりでは、何處の田にも苗の根元まで十分に水が來てゐた。朝風に夕風に

苗は静かに靡いて、蜻蛉などがその葉末にとまつてゐたりした。田の畔に近寄ると、蛙は音を立て、水の中に飛込んで行つた。

静かな白い雲が映つてゐたり、田の畔を劃つた榛の並木の影が映つてゐたり、杉森の黒い影が田の一角を薄暗く見せたりした。桑畑で桑を摘んでゐた娘達は、俄に降り出して來た雨に慌て、その田の畔を抜けて、寺の森の中に入つて行つたことなどもあつた。夕日は明るくその水田の一面を照した。

この田のところの向ふには、一軒藁葺の百姓家があつて、そこからは、向ふの別な田に働きに行く百姓夫婦の姿がいつも見られた。婢は鎌や水を入れた土瓶などを持つて、七歳位になる女の兒を伴れて、その畑の傍の榛の並木の蔭を通つて、朝露の深い路のレールを越して向ふに行つた。その百姓家の向ふには停車場に近い倉庫の白い壁だの、運漕店のこじんまりした勝手元だの、助役の住宅の草花の庭などが見えてゐた。貨車から豆糟の丸い肥料を運ぶ人足の懸聲が

終日そのあたりにきこえて來てゐた。

時々見廻りに來た主僧は、歸つてから上さんに言つた。

『何うもいかな』

『旨く行きませんか』

『すつかり田をわるくしちやつてるからな、肥料を入れても無駄なやうな氣がするな』

『だつて、肥料を入れずにもおかれますまい。……だから、銚公に貸せや好かつたんだ』

『うん』主僧はこんなことを言つてゐたが、少し考へて、『仕方がねえ。今年ハマア、損をしても、肥料を入れてつくつて見るさ。あれでも、ちつとは穫れるだんべ』

『正公の田はよく出來てるねえ。矢張かせぎ者は違ふだ』

その田と相接してゐる田の苗の發生の好いのを思ひ出して、上さんは言つた
『本當だ。正公の田は好い。矢張、かせぎ者でなくちや駄目だよ。怠け者に
借しちや往生だ』

『作の野郎のは、ひどいんだから。あいつに作らせるよりは、それでもまだ
此方でやる方がましかもしんね』上さんはこんなことを言つて、勝手の方へと
下りて行つた。

ある日、主僧は言つた。

『何處の女だんべ。あそこいらにまごつくしてゐるのは？』

『今日もゐるかえ？』

上さんは笑ひながら言つた。

『いつでもゐるんかえ？』

『色の白い、少し肥つた、背の低い女だんべ？ 男は？』

『男はゐなかつたがね。男もゐることがあるんかえ？』

『此間はゐたツけ……。あの倉庫の壁んとこにくつつくやうにして、こそこ
そ話をしてゐたツけ……。』

『何處の女だらう？』

『川島の酌婦だよ。此間、來たばかしなんだつて？』

『ふん、あれがね……。』

これでその時の話はお了ひになつたが、主僧はその後も度々其女の倉庫の白
壁のところ立つてゐるのを見かけた。女は银杏返しに結つて、セルの單衣に
縮緬と繻子の腹合せの帯をしめてゐた。ある時には、女はゐなくつて、田舎の
子息らしい髪を分けた二十三四の男が其處等をぶらぶら歩いてゐた。

ある日の午後、主僧は一番草を取つたあとの様子を見やうと思つて、暗い杉
森をぬけて、明るい野の方へと出て來たが、ふと、いつもの倉庫の白壁の陰に

その男と女とが相對して、熱心に何か話してゐるのを主僧はちらと見かけた。榛の並木の蔭になつてゐるので、此方の此處に立つてゐるのは向ふからは見えないが、向ふの壁にくつくやうにして話してゐるさまは、此方からは手に取るやうに見えた。女は後姿を見せて男の手を執つてゐた。男の顔は際立つて白く見えた。

主僧は長く見てゐるのに忍びないと言ふやうに、寧ろさういふシーンを攪き亂すに忍びないといふやうに此方から身を隠すやうにして、田に添つた榛の並木を別な方へと靜かに出て來た。半ば老いて髪もやゝ白くなつた主僧の頭腦には、此時何年にも思ひ出したことのない遠い昔が、美しい繪でもあるやうに靜かに浮び出して來てゐた。青春の歡樂、血の燃えるやうな烈しい戀ごころ、美しい房々した娘の髪、何も彼も忘れて互に寄添つて行つたやうな温い肌、「あ、あれも死んだんだ。もうこの世の中にはゐないんだ」かう思ふと、不思議な人

間と人生とが今更のやうに主僧の心に繰返されて來るのであつた。

先住が勸請した不動堂、その門前の兩側に並んだ茶屋、湯屋、あの時分は賑やかであつた。先住は町に法事などに行くには、いつも駕籠に乗つて二人も三人もつれて出かけた。金襴の袈裟は美しく日光に光つて見えた。維新の瓦解の後に漲るやうに押寄せて來た廢類した氣分、絶對に表面ちよてしきにはすることの出來なかつた大黒を——ある時はその爲めに危く牢に入れられやうとした女を、先住は其時分はもう幅で寺に伴れて來て一緒に住んでゐた。主僧は十七八の可愛い若僧姿をしてゐる自分の姿を其處に見た。茶屋の女や湯屋の娘達に大騒ぎをされてゐる自分を見た。夕暮にそつと寄つて來て自分に抱きついたのは自分よりも五つも六つも年上の色の白い女であつた。ある娘は、自分が庫裡の玄關の傍の三疊で佛書を讀んでゐると、いつもそこに來て、障子をそつとつばで濡して穴をあけて、そこから眞珠のやうな澄えた眼を見せた。

しかし、さうした多い情よりも一層深い濃い情がかれを別な方へと伴れて行つてゐた。お貞——其女のことは今でもかれの頭にはつきりと浮んで來た。其時と今との間に経過した年月もそれを遮る力はなかつた。かれにはそれがまだ昨日のやうに思はれ、お貞が其處にゐるやうに思はれ、自分がまだ十八九の若い僧であるやうに思はれた。お貞は先住とその大黒との間に出來た綺麗な娘であつた。その時十七であつた。

今から十年前に、主僧はある親しい友達に話した。『私が此寺に住職になつて來た時には、その女はまだ近在の町へ嫁いて生きてゐたんですよ。私がね、こいつ(今の妻)を貰つたのを聞いて見に來たことがあるんですよ。こいつは、其時、知らないもんだから、平氣な顔をしてゐましたけれど……。あとで、こいつのわる口をいろいろ言つたつて言ふことでした。可笑しなもんですね。え、え、それはもう關係が深かつたんですとも……。私が足利の僧房に修行に行

く時なんか、お互ひに前の夜は遅くまで爐ばたで泣き明してそしてわかれて行くやうなわけでしたんだから……。え、その女ばかりぢやない、お袋がさういふことを娘のするのを平氣で見てるやうな女でしたから』

『何うして死んだんです』

「病氣で死んだんですがね。今、生きてゐると面白いんだが」などと言つて、主僧は其時笑つたが——その時分には、酒に酔ひなどすると、上さんを捉えてその女の話を書かせたり何かするのが例であつたが、此頃ではもうその話などは何處かに行つて了つて、お貞のおの字も出なくなつて了つてゐた。それが不思議にも今美しい鮮かな繪となつて、再び主僧の眼の前に現はれ出して來た。

主僧は後に手を組みながら、其時分と同じでありながら、本堂も庫裡も鐘樓も山門も、全くその時分の賑やかな派手な色彩を失つて了つてゐるのを見た。あたりは靜かなさびしい落附いた空氣で満されてゐた。不動堂の門前の繁華も

一度全く亡びて、今は貧しい町の人々の長屋になつてゐた。主僧は山門から鐘樓の傍を通つて、荒れ果てた不動堂の傍に行つて立つた。先往のあのやうな熱心と努力とで、兎に角一時は賑かな門前町をつくつて、參詣者なども遠くから集つて来るやうになつたのも、忽ち荒廢の址を留むるにすぎなくなつて了つたことを主僧は繰返して考へた。

やがて主僧は庫裡の方へと戻つて來た。臺所に上さんはゐるたけれど、主僧はいつものやうに言葉をかけやうともしなかつた。主僧は其日一日、青春の歡樂の追憶の甘い空氣に浸つて、それから離れることが出來ずに暮した。

一番草、二番草、その田の稻は次第に成長した。到底隣の出來榮へと比べることは出來なかつたけれど、それでも緑の色は段々濃かになつて行つた。暑い日影が照つたり、夕風が靜かに渡つて行つたり、雨が斜に降つて通つたりした。

主僧はその頃は寺の用事が忙しいので、もう以前のやうにその田のほとりに姿を見せなかつた。倉庫の白壁のかけて媮曳した酌婦の遁けた話は、それでも寺までは聞えて來て、『はゝア、さうかえ、近在のものかえ。何處へ行つたかわからないのかえ。』など、主僧と上さんとはちよつと話の種にした。しかしそれでもすぐ忘れられて行つて了つた。町ではいろんなことがあつた。郵便局の息が首を縊つたり、かけ替のないある金持の一人子息が死んだり、年を取つた親切な寺の世話人が昨日まで丈夫である朝ほつくり死んで行つたりした。その世話人は先住が不動堂を勸請する時分から何彼と寺の世話をした人で、主僧が放浪生活からこの寺に入つて來る時にも、何彼と親切に口をきいたり肝煎りをして呉れたりした。律義な堅い一方の青縞屋さんで、滅多に昔の話などはしなかつたけれど、時には二三杯の酒に酔つて、先住の不動様時代を話し出すことがないでもなかつた。『本當に、あの時分はえらい騒ぎでしたからな。先住は借

金の殖えるのなどには構はずに、朝から酒を飲んでゐる。お大黒様はびらしやらして不斷着に絹物を着てすましてゐるといふ譯ですから、とても堪りこはありやしません。それに、あの今、前にゐる青山が、その時分、酌婦と駈落なんかして、先住は心配する。お袋は泣く。えらいことがありましたよな』など、話して笑つた。主僧の兄弟子で、其頃三十位であつた僧は、今でも近在の寺に住んでゐるが、この世話人とは殊に合口で、何うかして寺で邂逅することなどがあると、二人は何の彼のとその時分のことを盡きずに話した。葬式の時には、その老僧はわざ／＼草鞋ばきで遠くからやつて来て、主僧と一緒に長い長い讀經をした。

『吉川さんが死んでは、もう昔のことを知つてゐる人も町にはゐなくなつて了つた。好い人だつたがな。あの人の聲を聞くと、その時分のことゝが浮び出して来るやうな氣がしたがな。段々、昔が遠くなつて行つて了ふんだ』あとで

かう主僧は上さんに話した。

二三年前までは、主僧は閑暇すぎて困つたほどであつたが、宗務所の札が山門にかけられるやうになつてからは、人の出入りも多くなれば管内の僧侶達も何の彼のとやつて來るといふ有様で、時には上さん一人では手が廻りかねて、近所の懇意な女達を頼んで來るやうなこともないではなかつた。僧侶がやつて來ると、『まア／＼何がなくとも？』と言ふ風で、主僧はいつも上さんに酒の支度をさせた。

湯豆腐、精進揚、前栽物付で、さういふ人達は、酒を飲んで歸つて行つた。

『まア、さう、言つたもんぢやないよ。酒の一杯も吞ませて置けば、何その時に役に立つものだ』主僧はこんなことを言つて、忙しいのをこぼす上さんを手で制したりした。

上さんも長い間には段々酒を飲み習つて來てゐた。始めは、一二杯で眞赤に

なつて、すうすう言つて苦しがつてゐるものだが、此頃では、夜は主僧の酒の相手も少しは出来るやうになつて來てゐた。町の人達は、古い煤けた庫裡の一間で、長火鉢を挟んで、薄暗いランプの光線の下に浮き出すやうにして二人が盃を手にしてゐるのを、をりをり見かけた。「もう澤山、そんなに飲むと、あと片附が出来なくなるで」などと言ひながら、上さんは主僧の酒を強るるのを喜ぶやうに見えた。

『酔つたら、俺が手傳つてやら』

かう言つて、にこ／＼しながら、主僧は盃を上さんにさした。

何うかすると横綴の長い酒の通帳をひつくり返して見てゐることなどもあつた。「は、もう、随分飲んだぞ。盆には、取られるぞ。一番酒が大きいな。かう言つて、それを傍に置いて、でも、まア好いや、酒だけだ。道樂は——。酒位十分に飲まなけりや、生きてゐる効がないからな』

『もう、いくら位飲みました？』

『さうさな』ちよつと勘定して見て、指を四本出して見せた。

『さうなりますかね、……此間のが大きいから。三人で一日に五升も飲んだんだもの。あん時はびつくりしちやつた』

『まア好い好い。今年は桑を旨く賣つてやつたから』

かう言つて主僧はにこ／＼してゐた。

裏の小さな池に來る割葎たじまは、土用になると、ぱつたり聲を絶つて了つた。暑い暑い日が毎日のやうに續いた。夕暮には、古い軒に蚊柱が立つて、その鳴く聲が鼎の沸くやうに聞えた。草は取つても取つてもあとから出て來た。勝手の流元の溝の周圍には、一杯に青い草が繁つて、汚ないよごれた水が長い木の樋から落ちた。

『田は何うだな。水はあるかな』

主僧はある時墓掃除の男に訊くと、

『水は大丈夫でさ』

『草は？』

『草も此間取つておきやんした』

『ちつたア、取れべいか？』

『取れやすとも……。なアお上さん、此頃は始めのやうなことはがアせんなア。あれぢや、實もかなりつくべいと思ふだ』

『さうかな』

『作の野郎にやらせて置くよりやぐつと好いつて、此間もお上さんに言ひやしたのさ』

主僧は矢張其處に行つて見るやうなことはなかつた。しかし、墓掃除の男の言つたやうに、土用に入つてから、其處の田の稻はぐつと好い勢を見せて來た。

幸ひに虫もつかずに順當に育つて來た稻の緑は、靜かに朝風に靡いてゐた。

その間に、汽車の助役は變つて、前の肥つた細君の代りに、今度は小學校教師の上りだといふ色の淺黒い背の高い束髪の女が來てゐた。今度のは、子供がないので、亭主の留守を寢そべつて、雜誌だの小説だのを讀んでゐるのが此方の路から見えた。百姓夫婦は相變らず朝早く支度をして野の方へと出て行つた。

野には朝日が朗らかにさした。

賑やかな孟蘭盆、それもやがて過ぎて行つた。寺の山門の中の舗石道には、紅い白い松葉牡丹などが咲いてゐた。虫の音が段々繁くなつて、草原には蠡斯ばうただのかまきりなどが飛んだ。近くの町の女學校の寄宿舎から歸つて來た寺の娘は、畠の縁に並んで出來てゐる玉蜀黍を晝中よく折りに出かけて行つたが、それももう残り少なくなつて、幹も葉も赤く枯れて、玉蜀黍の實の毛は黒くぢぢれて見えた。畠の茄子も段々小さくなつて行つてゐた。

娘は休暇中を多くは三味線や踊の復習に費やした。娘は主僧と上さんとの間に出来た子とは思はれないほどの品の好い容色の好い娘で、女學校に行かない以前には、學校から歸ると、包を臺所に投げ出して置いて、町の踊の師匠の許へとすぐ出かけて行つた。娘は春雨や潮來や松の緑などを踊つた。大浚ひを町の芝居小屋でした時には、主僧夫婦は、尠なからぬ金をかけて、派手な長襦袢のやうな模様の縮緬の着物を拵へてやつたりした。主僧夫婦に取つては、娘は何物にも替へ難い寶のやうに見えた。

その娘が寄宿舎の方へ歸つて行く日は、あれ模様で、風雨が凄しく裏の梢を鳴した。通の方へ出て行く裏の近路は水に浸つて歩けないので、娘は山門の方から大廻りをして母親に送られて、町はづれの馬車の繼立場へと行つた。馬車の周圍を卷いたズツクから雨滴が落ちて、御者の體はすかりびしよ濡れになつてゐた。

母親は車軸を流すばかりに降り頻る風雨中に、傘を傾けて立ちながら、娘の乗つた馬車が靜かに出て行くのを見てゐた。

凄しい暴風雨はやがて來た。裏の森は鳴り、木の葉は飛び、鼠色をした雲はちぎつて投げられた古綿のやうに早く早く暗澹とした空を掠めて行つた。寺の高い屋根の樋からは、雨が瀧津瀬のやうに漲り落ちた。

夜半に凄しい音がしたと思つたのは、それは裏の森の中の大きな櫛の枝の折れたのであつた。朝になつても、風雨はまだ止まなかつた。井の水を汲むためには上さんの髪はしどとに濡れた。

暴風雨の野のさまは慘憺としてゐた。野菜はすつかり倒され、田の稻は半ば水に浸された。

『えらい荒れでしたな』

『困りやんしたな』

『土手が何處か切れたッて言ふぢやないか』

かういふ噂はやがて彼方此方からきこえて來た。風雨は一時やんで、明るい日影がさしたけれど、あれ模様はまた容易に収らなかつた。小學校の屋根の向ふに見える天氣豫報の旗は、依然として暴風雨の警戒を解かなかつた。

此次の日も晴れたり降つたりしてゐた。日が明るくさして、空が青くなつたと思ふと、やがてまたすぐ曇つて雨は車軸を流すやうに降つて來た。

米が高くなつて却つて好いかも知れないなどと始めは言つてゐたのが、次第に不作の心配になつて行くのを人々は見た。毎朝の新聞には、各地の出水が二號活字で報道され、T川の土手がところ／＼危いなどいふことも業々しく書かれてあつた。

『困つたもんですな』

『早く晴れねえぢや困るが……』

こんなことを人々の繰返す中にも、矢張暴れ模様はそのまゝに續いて行つた。一日は風が強く吹き、一日は雨が烈しく降つた。一週間目には、人々は心配らしい顔をして、T川の刻々に増水するさまに胸を轟かせた。一里と隔らない川添ひのなにかし町では、人々皆な結束して、夜は高張の提燈が濁流の漲り渡る土手の闇を照して、その光景は丁度戦場のやうであるといふことであつた。近在の村々には、地水が出て稻の穂のすつかり浸つて了つたやうなところも少くなかつた。毎日裏の森を掠めて通つて行く汽車は、この停車場に入る一里ほど前のところで、すつかり水に蔽はれた畠や田の中を通つて來てゐた。

しかし寺の後の田は、さういふ水害の影響も少しも受けずに、靜に黄く熟して行つてゐた。穂はさして大きくはないけれども、それでも平年作位の收穫は確かであつた。暴風雨の過ぎた後は、空は連日美しい碧に展けて、光線の強い秋の日影は、靜かな潤々とした野に濃かなさびしい影を投けて行つた。垣の蟲の音

は次第にかれがれに、街道を通る荷車の音は高く夕暮の空に響いてきこえた。冴えた月の光は、夜毎に露の多い野の草道を照した。黒く地上に落ちた町の家々の庇の影、何處からともなく匂つて来る木犀のかをり、睦じさうに並んで歩いて行く二つの影——秋は次第に深くなつて、忙しい收穫はやがて野にやつて来た。

一年の收穫を樂しむやうにして、百姓達は皆な忙しく野に出かけて行つた。男女の群は其處にも此處にも群を成して黄く熟した稻を刈取つてゐた。髪の上の白い手拭、赤い襷、時には鎌の刃に日影のきらきらと映つて光るのが、其處を通つて行く汽車の硝子窓に反射したりした。夕暮には、刈稻を山のやうに積んだ車が靜かに街道を村の方へと輾つて行つた。朝夕は日増に寒くなつて最初の霜は田に刈り干した稻の束を白くした。

寺の田の稻は、矢張、墓掃除の男と日雇取とに刈られたが、時には上さんの

手拭をかぶつた姿などもその中に雜つて見えた。一日二日してから、その日雇取達はやがてその稻を寺の庫裡の前の庭へと運んで来た。

「餘程あるなア」

「これでも五六俵はあるべ」

「まアよくついた方だんべ。作の野郎につくらせるよりは得だア」

墓掃除の男はこんなことを言つた。

稻扱きは、近所の百姓が来てして呉れた。廣い庭には大勢の男や女が集つて一日ですつかりそれを扱にして了つた。『かうして置きさへすりや、いつでも米にするのはわけはねえから、その中、家の方の川でもすんだら、また、一日二日来てやつてやんべ』その百姓はこんなことを言つて、その扱を廣い庫裡の玄關の隅へと置いて行つた。

一日は一日と經つて行つた。町役場の兵事係が来て、演習の兵士の爲めの割

宿をきめて行つたりした。その兵隊達もやがてやつて来て、三日ほどとまつてそして立つて行つた。風が潮のやうに裏の山を鳴して行く夜などもあつた。ある時、上さんは言つた。

『靱にして置いても仕方がねえ。あれを何うかしたいもんだが』

『平公でも頼んだら、何うだ』

『平公も怠け者でなア』

『ぢや、正公は？』

『皆な忙しいから。一人前のものは、皆な日雇取に行つてゐるから』

『それぢやまア、放つて置け』

『でも、なア、今の中、して置くと、面倒がなくなつて好いんだがな』

主僧は丁度其時忙しかつたので、別に深く取合はずに好加減な返事をしてゐた。

二三日してから、上さんはまた言つた。

『片附けて了ふと好いんだがな』

『誰かるねえか』

『平公でも仕方がねえから頼むか』

『さうするが好い。』

で、上さんは收穫のあら方片附いた懇意の百姓の家へ行つて、唐臼と唐箕とを借りて來ることにした。二三日すると、上さんは、庫裡の女關の前の處に竿を十文字にわたして、それに唐臼を仕かけて、平公と二人でそれをごろごろと廻し始めた。

少し智慧の足りない丈の高い平公は、にや／＼笑ひながら、上さんと一緒になつて終日頻りに働いてゐた。主僧はをり／＼女關のところに行つてそれを見てゐた。

夜、上さんは言った。

『平公は何うもつかひにくくつて仕方がねえ』

『何うして?』

『何うして?』 唯、うはの空で白を廻してゐるだで、ちつとも力にならねえ。誰か他にゐると好いけれども……』考へて、『正公だと、餘程好いんだけども……』

『正公、何處かへ行つたのか』

『さつきも行つて見たが、何うも頼まれてゐるんで、手が離せねえツて言つてゐたつけ』

『他にはねえかな』

『さうさ……』こんなことを言つて、上さんは靜かに夕飯を食つてゐた。

その使ひ難い平公を相手に、それでも上さんは三日ほど働いた。扱はもうそ

の三分の二ほどこなされてあとにはいくらも残つてゐなかつた。『さうだな、五俵と少しあんべ』など、上さんは言った。

一日は平公は加減がわるいと言つて何うしてもやつて來なかつた。一日は終日雨が晴れずに暮れた。唐箕は空しく庫裡の入口のところに幅をして置かれてあつた。

あくる朝、平公を待つてゐてもやつて來ないので、上さんは主僧に言った。

『あんた、ちよつとやつて呉れませんか』

『俺れがか——』

『え』

『やつても好いけども……』

『やつて下さいよ。さうすれや片が附くから。白だつて、さういつまでも借りて置いちや先方だつて困るだんべ。』

『平公は何うしても来ねえんか』

『あいつは、ぐづぐづしてゐて、来ても役に立たねえから』

『ぢや、やつてやんべ』

主僧はかう言つて立上つたが、「まだ餘程あるんか？」

『もういくらもねえよ、半日かゝりや出来ると思ふんだがな』

『ぢや、やらう』

で、上さんは外へ出て、また昨日のやうに十文字に張つた竿に臼をしかけて、一方には唐箕を出して、その傍に新しい筵を二枚ほど敷いた。

暫くすると、主僧は古い單衣を着て、手拭で頬かぶりをして、そこに下りてそして臼の前に行つた。上さんは臼の中に靱を入れて、そしてそれを廻し始めた。臼の廻る音が遠雷の轟くやうに聞えた。

それは晴れた風のない好い日であつた。井戸の傍に咲いてゐる白い赤い朝鮮

菊の向ふに、玄關と本堂へ通する廊下とを背景にして、背の低い主僧と體格の大きい上さんが、一緒に一生懸命に臼を廻してゐるさまは、丁度レリーフか何かのやうに、くつきりと明るい午前の光線の中に浮き上つて見えてゐた。臼の棒が上さんの方へ行く時には、主僧の腰は浮くやうにをかしく動いた。

あたりはしんとしてゐた。其處には誰も訪ねて来るものもなかつた。上さんはやがて再び臼の中に新しい靱を入れた。臼の棒は頻りに動いた。傍では鶏がコ、と集つて来て餌を拾つた。

『何年振りだかな、臼を挽くのは——』主僧は休んでゐる間にこんなことを言つて考へて、『もう三十年も挽いたことがないからな。くたびれるわけだ』

午後に其處にやつて来た百姓の上さんは、『方丈さん、あゝ見えても、中々旨めいだな。腰振が好いな。なア、お上さん』などと言つて笑つた。

唐箕にかけたり、箕で吹いたりして、すつかりその仕事の終つたのは、もう

かれ是れ薄暮に近い頃であつた。上さんが唐箕や臼を藏つたりしてゐる間に、主僧はさつき水を汲んで火を燃して置いた据風呂の竈の下に、大きい木の根の割つたのなどを入れた。労働の後の疲労と暢氣な百姓めいた心持とは、久し振で、主僧の體にある楽しい氣分を沁み込ませて行つてゐた。

上さんにまかせて好加減に上にあがつて來た主僧は、湯に入つて、好い氣持になつて、着物を着替へて玄關の方へと出て行つた。日はもうすつかり暮れ果てゝゐた。主僧はふと何年にも嗅いだことのないある好いにほひを鼻にした。それは丁度昔馴染の女に長い年月を隔てゝ逢つたやうな感じであつた。主僧は高く積まれた糶がらのぶすぶすと赤く燻つてゐるのを其處に見た。

此頃では、糶がらは養蠶の材料に買はれて行くので、何處の農家でも昔のやうにそれを燃して了ふやうな家はなかつた。主僧はぶすぶすと赤く燻ぶる火と一種言ふに言はれないそのにはひとを背景にして、女の許にあくがれて行つた

自分のわかい時を思ひ出さずには居られなかつた。かれは庫裡の玄關の前に立つて、一ところ闇に赤く見えてゐる火をじつと見詰めて恍惚としてゐた。お貞のことなどがまた眼の前に浮んで來た。

(をはり)

大正九年四月二十五日印刷
大正九年四月二十八日發行

編一第集選作傑代現



【正價金壹圓四拾錢】

著作者 田山花袋

發行者 池田憲之助
東京市神田區三崎町三丁目一番地

印刷者 小島爲吉
東京市神田區西小川町二丁目六番地

印刷所 大成社
東京市神田區西小川町二丁目六番地

發行所

東京市神田區三崎町
三丁目一番地(西通)

學藝書院

電話番町七四二番
振替東京四六九七九番

回 集 選 作 傑 代 現 回

編 二 第

■ 強 氣 弱 氣

里 見 淳 氏 作

容 内

強氣弱氣——友達の見舞——腹いたみ——入間川——
 願のない小説——お民さん——易い追儼——髪の鞭打
 夜櫻……

編 三 第

■ 残りの炎

德 田 秋 聲 氏 作

容 内

残りの炎——偏執の心——威嚇——棄てられた女——
 慈愛——家を離れて……

■ 支那人の娘

編 四 加 能 作 次 郎 氏 作

■ 公爵の氣まぐれ

編 五 岩 野 泡 鳴 氏 作

◀ (錢 十 一 送 料) 錢 拾 四 圓 壹 金 册 一 價 正 ▶

389
31

終